昭和49年11月1日発行（毎月1回1日発行）第23巻・第11号　昭和29年6月23日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2836号　昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR

中島
月光夜戦



☆特集☆
ミラマー海軍航空基地の空母戦闘機隊
英空軍パイロットのジャガー試乗レポ
アブロ・ランカスター爆撃機スナップ

'74 NOVEMBER 11

$3.30



F-14A Tomcat of VF-1, NAS Miramar, Calif.

ミラマー海軍基地に翼を休めるF-14Aトムキャット。空母エンタープライズ(CVAN-65)に配備される第1戦闘飛行隊(VF-1)の所属機。



F-14A (159019) of VF-14, NAS Oceana, Va. (Photo: Dave Ostrowski)

F-14Aトムキャットの部隊は，最初の実用部隊第124戦闘飛行隊(VF-124)につづいて，VF-1，VF-2，VF-14，VF-32などがつぎつぎに編成されつつある。

〔上〕第14戦闘飛行隊(VF-14)所属機で，7月28日，バージニア州のオシアナ海軍基地で撮影。シリアルは159019。

〔下〕同じく7月28日，オシアナ海軍基地の第32戦闘飛行戦(VF-32)所属機で，シリアルは159008。

F-14A (159008) of VF-32, NAS Oceana, Va. (Photo: Dave Ostrowski)





F-14A of VF-2, NAS Meramar, Calif.

空母エンタープライズへの配備にそなえて、ミラマー基地で錬成中の第2戦闘飛行隊(VF-2)所属のF-14A。写真の機体は第14空母攻撃航空団(CVW-14)の司令官機。



Koku Fan camera vigita NAS Miramar

カリフォルニア州サンディエゴの郊外にあるミラマー海軍基地は、米太平洋艦隊戦闘機部隊のホーム・グラウンド。輪番で任務についている空母の戦闘機部隊は，遠洋から帰るとこの基地に上陸して骨を休め，つぎの出航にそなえて訓練にはげむ。常に数個飛行隊の戦闘機が翼を並べている西海岸でもっともにぎやかな海軍航空基地。





〔左上〕このミラマーで編成されたF-14の実用訓練部隊VF-124のF-14A。〔上〕同じくミラマーで編成されたVF-1のF-14A。VF-1はVF-2とともにF-14の最初の実戦部隊として近く空母エンタープライズに搭載されることになっており，ミラマー　の訓練も最後の仕上げ。〔下〕第302戦闘飛行隊(VF-302)所属のF-4B。

F-4B Phantom II of VF-302





F-4B Phantom II of VF-51, NAS Miramar

上：空母コーラルシーを降りて，ミラマー基地で休養している第51戦闘飛行隊（VF-51）所属のF-4Bファントム II。この部隊のF-4Bは，以前にコーラルシーに積まれて来日しているが，来日当時にくらべて，マークなどの塗装が地味なものとなっている。

下：同じくコーラルシーに配備されている第111戦闘飛行隊（VF-111）所属のF-4B。特徴のある"旭日"の部隊マークをつけているが，このマークも以前は垂直尾翼全面に画いた，大きな派手なものであった。

F-4B of VF-111, NAS Miramar





F-4B of VF-302, CVWR-30 [illegible]

第302[illegible]（VF-302）[illegible]第30[illegible]
[illegible]である。

来日したハリアー部隊



Harriers of VMA 513 arrive at MCAS Iwakuni, 30 Aug 74



去る8月13日に空母トリポリに積まれて来日，岩国基地に駐留することになった米海兵隊の第513攻撃飛行隊(VMA-513)“フライング・ナイトメアズ”のAV-8Aハリアー。来日したのはウイリアムJ.シューレン中佐が指揮する16機。第311海兵攻撃飛行隊(VMA-311)のA-4スカイホークに代って，岩国で任務につくことになった。なお，VMA-513と交代したVMA-311は，VMA-513の前任地であるサウスカロライナ州ビューフォート航空基地へ転属した。

前ページおよびこのページは，空母トリポリを発艦して岩国基地へ到着したばかりのハリアー。主翼下に400ガロンのフェリー用増槽をつけ，機首に空中給油の受油ブームを装備しているが，これは簡単に取りはずしが可能である。





Harrier GR.1 of RAF



▲高々度で飛行テスト中のコンコルド量産2号機(202)。202は通算6機目のコンコルドで、ブリティッシュ・エアウェイに納入される1番機である


UK
AF 70 334

⬆ Shark-toothed Phantom II, Yokota AB, 4 Aug 74 (Photo: K. Tadaaki)

〔上〕先月号のアート・ページでも紹介したが，このほど横田基地に飛来した"さめ口"のF-4E。韓国に駐留する米第3戦術戦闘連隊(3TFW)の所属機で，機首の"さめ口"は，タイ国駐留当時の名残り。

〔下〕このほどイギリスのグリーンハム・コモンで開かれたエア・ショーに展示されたF-4Dファントム II。米第48戦術戦闘連隊(48TFW)の所属機である。風防の側面に，こんどアメリカの戦闘機に標準装備となった広角のバック・ミラーがつけられているのに注意。

〔右〕同機の増槽に画かれているマーキングのクローズアップ。





⬆ ⬅ F-4D of 48th TFW, Greenham Common Air Tattoe, 6 Jul 74 (Photo: Roger Wright)

フィンランド空軍のMiG-15UTI



MiG-15 Trainer of Finland A.F.

フィンランド空軍が装備しているMiG-15UTI複座練習機。[illegible]

MiG-15 trainer of Finland A.F.



20ページと同じく，フィンランド空軍のMiG-15UTI。MiG-15の複座練習型には，機首にレーダーを積んで，前面の上部が突き出たMiG-15UTI(SP-5)もあるが，写真の機体は普つうの複座練習型である。

初飛行したHS.1182ホーク

Hawker Siddeley Hawk flys for the first time. 21 Aug 74.

8月21日，ダンスフォルドのホーカーシドレー テスト場で初飛行したHS.1182ホークジェット練習・攻撃機の原型1号機。初飛行は同社の主任テストパイロット，ダンカン・シンプソンの操縦で53分間にわたって行なわれ，高度20,000フィートまで上昇した。





Hawker Siddely Hawk, first prototype, takes off for her maiden flight, Dunsfold U. K. flight test center, 21 Aug 74.

前ページと同じく，8月21日，初飛行に離陸するHSホークの原型1号機．本機は英空軍のナットやジェットプロボストに代る練習・攻撃機として開発しているもので，エンジンはロールスロイス・チュルボメカRT 172-06-11ターボファン(2,422kg)×1。



MRCAも初飛行

P-01 prototype of MRCA completes her maiden flight at Manching, Germany, 14 Aug 74.

予定よりも約4ヵ月も遅れて去る8月14日，西ドイツのマンヒンクで初飛行した英・西独・伊3国共同開発の多用途戦闘機パナビアMRCAの原型1号機P-01。飛行は30分間にわたって行なわれたが，写真上は主翼をほぼいっぱいに展張した後退角約30度で飛行中のもの。写真下は着陸姿勢で，右側エンジン吸気口おおいのブロウイン・ドア2枚が開かれているのに注意。初飛行の操縦はBAC社の軍用機部門のチーフ・テストパイロット，ポール・ミレット氏が担当したが，同氏は飛行後，「初飛行だということを感じさせないとびぬけた性能を秘めた飛行機で，低速でもまったく揺れることがなく，着陸時に使った逆推進も完ぺきだった」と語っている。

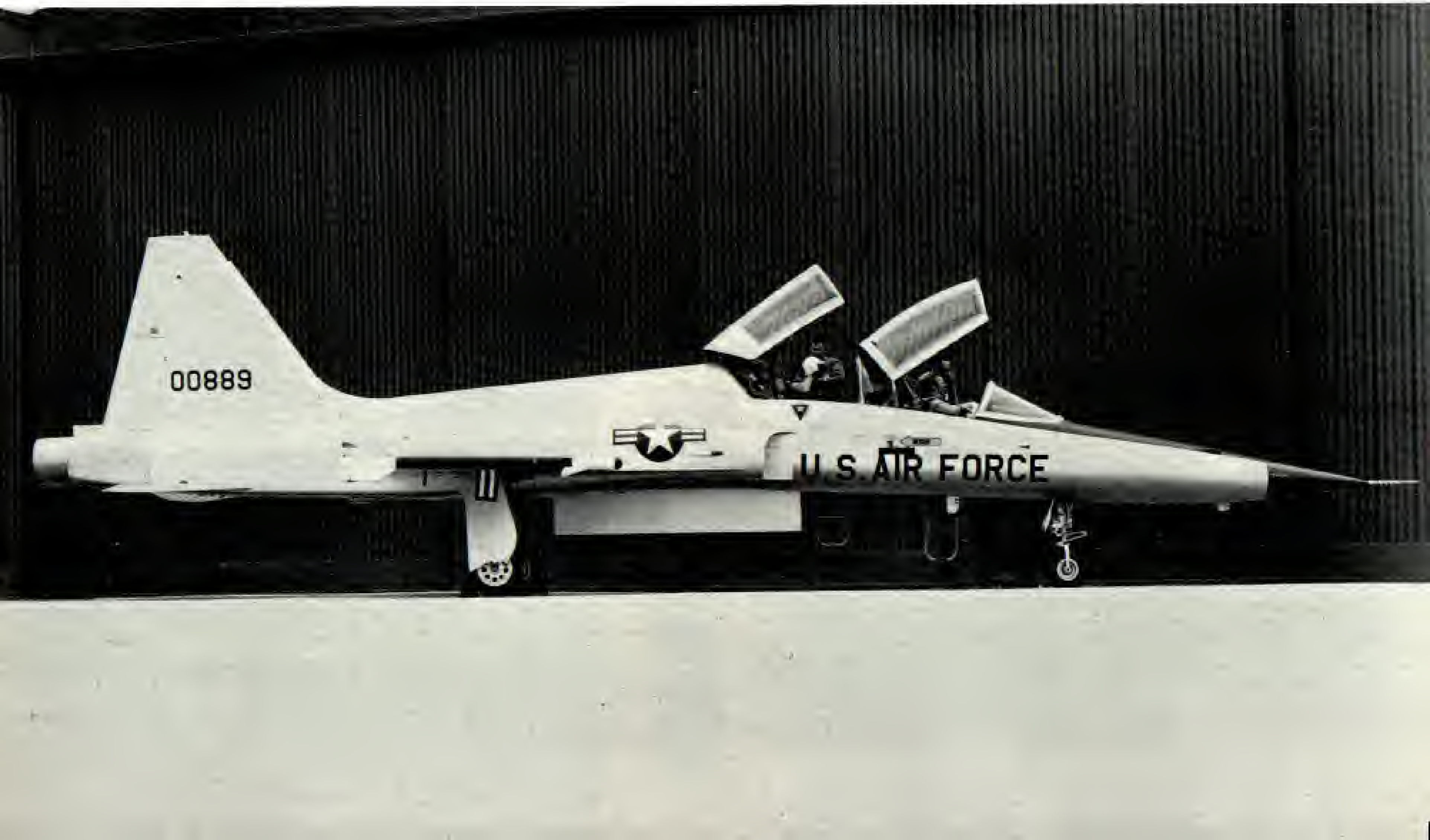




ロールアウトした
F-5F複座戦闘練習機

Northrop F-5F fighter-trainer makes its debut at Hawthorne, Calif., 14 Aug. 74. F-5F is the two place version of F-5E Tiger II International Fighter now in production.

ノースロップF-5EタイガーIIの複座戦闘練習型F-5Fの1号機が完成，8月14日，カリフォルニア州ホーソンのノースロップ社工場でロールアウトした。上と下の写真はロールアウト直後のスナップ。同機はエドワーズ空軍基地に運ばれ，まもなく初飛行する（本文の「海外ニュース」欄参照）。





ロッシーマス基地のジャガー

Jaguar GR.1, XX122/10 of the Jaguar OCU, RAF Lossiemouth, Scotland, 23 Aug 74 (Inter-Air Press)

スコットランドのロッシーマス英空軍基地で訓練中の英空軍とフランス空軍のジャガー。

〔上〕英空軍の実用転換訓練部隊のジャガーGR.1。主翼の内側パイロンに装備しているのは264英ガロン入りの落下増槽。主脚カバー後方の胴体両側下方に，30mmアデン機関砲の銃口が見える。写真の機体のシリアルはXX122/10。

⬇ Jaguar CR.1, XX726 of No.6 Sqdn (Inter-Air Press)





↑ FAF Jaguar A, A22 of ESC 1/7 (Inter-Air Press)

〔左下〕英第6スコードロンに配備されたジャガーG R.1の1機XX726。同機は機首にレーザー測距器を装備して，透明なくさび形の外形となった機体である。

〔上〕仏空軍第7連隊第1飛行隊(Esc 1/7)所属のジャガーA（シリアルA22）。同飛行隊はフランス空軍で最初のジャガー部隊である。

〔下〕仏空軍で2番目のジャガー部隊，第7連隊第3飛行隊（III/7）のジャガーE（E18）。複座練習型の機首クローズアップだが，タンデムに並んだ後方の前方視界も良好であることがよくわかる。

↓ RAF Jaguar E, E-18 of ESC III/7 (Inter-Air Press)





英国航空のトライスター

⬆ First Lockheed Tri Star delivered to BA

上．9月初めにロッキードのパームデール工場で初飛行した英国航空（BA）のトライスター1番機．同機は10月からマドリード，ダブリン，マジョルカ島，マラガ，パリ，ブラッセルなどのBA社欧州路線に就航する．BA社が現在確定発注中のトライスターは9機

下．このほど新明和甲南工場でロールアウトした海上自衛隊のPS-1飛行艇の15号機

⬇ PS-2 (No. 15) of JMSDF rolled out

PS-1飛行艇の15号機





ミラマー海軍航空基地

US Naval Fighters In Miramar NAS





前ページ上は可変翼をいっぱいに広げ、スポイラを開いて着陸するＶＦ-2（第２戦闘飛行隊）所属のＦ-14Ａ。前ページ下はＶＦ-1（第１戦闘飛行隊）の所属機。なお、ＶＦ-1とＶＦ-2の２飛行隊は訓練も終わり、初のＦ-14実戦部隊として間もなく空母エンタープライズに搭載されることになっている。





左ページ上と上の写真は、ＶＦ-124所属のＦ-14Ａ。この部隊は太平洋艦隊訓練飛行隊に属していて、F-14パイロットの転換飛行訓練を行なっている。上の写真の一番手前400番機は戦闘機・早期警戒混成航空団司令の乗機になっている。下はＶＦ-1所属のＦ-14Ａ。

(Left & top) F-14A of VF-124. Belonging to the Pacific Fleet, this squadron is engaged in pilot-replacement training. The "400" in top is the plane of the fighter/EW combined air group commander. (bottom) F-14A of VF-1





このページは第2戦闘飛行隊（ＶＦ-２）所属のＦ-14Ａ。主脚カバーの外側に見えるのはＡＡＭ取付けランチャー主翼付根部に黒く見える線は、初期生産型に取付けられているグラブ・ベーン張出し部。下は着陸するＦ-14Ａ。エアブレーキ、スポイラの形がよくわかる。

F-14A of VF-2. Note the AAM launcher seen outside of gear cover and the black line on the wing root is the glove vane, distinctive to its early production version. (bottom) F-14A. Airbrake, spoiler and other details are well shown.









上は予備部隊のＣＶＷＲ-30所属の第302戦闘飛行隊（ＶＦ-302）のＦ-4Ｂ。この飛行隊はＦ-8Ｊ使用のＶＦ-301と共に同基地に駐留していて、いつでも空母に乗り出撃できるようになっている。中右はＣＶＷＲ-30の司令官機。下は太平洋艦隊訓練飛行隊に所属している、第121戦闘飛行隊（ＶＦ-121）のＦ-4Ｊファントム。

(Top) F-4B of VF-302, CVWR-30. This squadron operates with VF-301, an F-8J squadron.
(Right, middle) CVWR-30 Commander's plane.
(Bottom) F-4J Phantom of VF-121, Pacific Fleet Training Flotilla.







ミラマー基地は、太平洋艦隊に所属する戦闘部隊のホームベースになっており、空母艦隊が母港に帰投すると、それらの搭載部隊はここに来て訓練を行なっている。上は空母コーラルシーに搭載されている第111戦闘飛行隊（VF-111）所属のF-4B。同飛行隊のF-4Bは、以前左写真のように機首レドームにサメロを書いていたが、現在はほとんど消されている。下は、VF-111と共に空母コーラルシーに搭載されているVF-51所属のF-4B。

(Top) F-4B of VF-111, USS CORAL SEA. Only few planes are still in the shark-mouth camouflage scheme. (Bottom) F-4B of VF-51, USS CORAL SEA



岩国基地に配属された
AV-8Aハリアー



Harrier Arrives At MCAS Iwakuni, Japan





去る8月13日、米海兵隊岩国基地の第1航空師団に海兵隊の新鋭機AV-8Aハリアーが配属になった。配属部隊は、サウスカロライナ州のビューフォート基地に所属していた第513攻撃飛行隊（VMA-513）の16機で、ヘリ空母トリポリに搭載されて岩国沖30マイルから発艦、4機ずつの編隊を組んで岩国基地に到着した。指令官はウイリアムJ.シューレン中佐。

The AV-8A Harrier was introduced to the First Marine Aircraft Wing with the arrival at Iwakuni NS of VMA-513 on August 13.







第513攻撃飛行隊は、1971年4月に海兵隊最初のハリアー部隊としてボーフォート基地で実戦配備された。また、2番目の部隊ＶＭＡ-542も編成されたほか、ハリアー用にヘリ空母グアムが海上統制艦に改造されるなど、米海兵隊のハリアー部隊も活発な活動を行なっている。

Assigned to Beaufort in April 1971, VMA-513 is known as the first Harrier squadron. Recently, VMA-542 was organized as the second Harrier unit, and helicopter carrier GUAM was also remodeled to carry the Harrier.













ＡＶ-８Ａハリアー（ハリアーＭＫ.50）は米海兵隊向けの単座戦術攻撃・偵察型で，装備品が多少異なるほかはイギリスのハリアーＧＲ.１Ａと同じである。左上は垂直尾翼附近で以前書かれていた部隊マークは現在はなくなっている。左中で背中に付いているのは戦術用ＶＨＦアンテナ、主翼前縁のボーテックスジェネレーターもよくわかる。主翼に取り付けられているのは400ガロンのフェリータンク。右上は機首附近、右中はスイッチ類の多いハリアーのコックピット。



1974年度



ファンボロ航空ショー

9月1日から8日までロンドン郊外のファンボロで開催された1974年度ファンボロ国際航空ショーの出場機を紹介しよう。上はA300B、ホーク、ニムロッドなどが展示された会場。下はスウェーデンから参加したサーブ37。迷彩塗装がほどこされた、手前が複座練習型のSK37。そのうしろは単座戦闘型のAJ37。







今回のショーは、アメリカ、フランス、ドイツなど世界各国の参加でかなり国際色豊かなものになった。また、S-3A、ホークなど新鋭機が多数参加して大規模な航空ショーであった。
（上）デモ飛行を終え着陸するコンコード。
（左）アメリカ空軍から参加したC-5Aギャラクシー大型輸送機。
（下）これもアメリカからの参加機ロッキードP-3C（左）とS-3Aバイキング対潜哨戒機。



フォート ニュース





〔上〕イギリスの新型機ホーカー・シドレー「ホーク」ジェット練習機が、8月中旬、同社のダンスフォルド空港で初飛行した。同機は低空を時速600マイルで飛行することができる。価格は1機850,000ポンドで、イギリス空軍ではすでに175機発注している。写真はサーレー・ダンスフォルドで初飛行する「ホーク」。

〔下〕カンサス州の農機具製造会社ヒストン・コーポレーションが購入したセスナ・サイテーション。同社では2機購入、レシプロ機のセスナ421ゴールデン・イーグルに代えて、セールスなどの社用機として使用するとのことである。あちらでは社用機も次第にジェット機に代替えされつつある。





このページ3枚の写真は，本誌6
月号フォートニュースで紹介した，
ポーランドとソ連で共同開発した農
業用機M-15の1号機。
写真のようにユニークな外形のター
ボファン・エンジン装備の機体で，
上翼と下翼を結ぶホッパのなかに，
総量2トン余の農薬を積むことがで
きる。また右ページ上の写真はウク
ライナの飛行機工場で生産されてい
るTu-134中距離旅客機。本機は1967
年からアエロフロートの国内と近距
離国際路線に就航，約100機が使用さ
れており，チェコや東ドイツ，エジ
プトなど海外のエアラインからも発
注されている。







〔右〕このほどカリフォルニア州バーバンクで、さきにイラン空軍が発注していた、ロッキードP-3Cオライオン対潜機6機のうち1番機の引渡式が挙行された。6機の購入価格は6000万ドルで、政府間取引きとして米海軍がイラン側と交渉に当った。

〔下〕ロッキードWP-3Dオライオンの完成図。NOAA（米海洋大気局）はこのほど、気象観測と天候の人工変化実験を行う目的で各種科学装置を装備したWP-3Dを2機発注した。1号機は来年5月、2号機は1976年1月に納入される予定。



スナップ だより



〔上〕新塗装になった第1海兵混成偵察飛行隊のRF-4B。垂直尾翼は黒でテイルレターと上下の線は黄色、（昭島市　山内裕之）。



〔中〕那覇基地で訓練中の第232戦闘飛行隊のF-4Jファントム。垂直尾翼は赤で、テイルレターとラダーが白。ラダーに「THE PICKLE」と書かれているのに注意、（西宮市　浜野　博司）。〔下〕横田基地に飛来したEC-135？同機の飛来は初めてのことである。尾翼マークに注意、（昭島市　鍋京隆）。



NAKAJIMA "GEKKO" NIGHT FIGHT



① 月光11型 第322航空隊所属機
J1N1, No.322 KOKUTAI



② 月光11型 横須賀航空隊所属機
J1N1, Yokosuka KOKUTAI



③ 月光11型 第251航空隊所属機
J1N1, No.251 KOKUTAI



④ 月光11型 第302航空隊所属機
J1N1, No.302 KOKUTAI



© K.Hashimoto

⑤ 月光11型 第153航空隊所属機
J1N1, No.153 KOKUTAI



Lancaster Mk. I

アブロ　ランカスター爆撃機　　AVRO LANCASTER

2次大戦のイギリス軍用機で，戦闘機を代表するのがスピットファイアなら，爆撃機のエースはこのアブロ・ランカスター。多用途の木製"異能機"モスキートと並んで，イギリスの大戦機を代表する傑作機である。野心作であったが失敗に終った双発爆撃機マンチェスターのエンジンをかえて4発に改造したのが，ランカスター。窮余の一策が生んだ優秀機というのは，わが5式戦でもおなじみのところ。初めて戦場に投入されたのは1942年3月。7,377機が生産され，2次大戦の出撃回数は156,000回，608,612トンの爆弾を投下している。大戦末期の1945年初めには56個爆撃中隊に約1,000機が可動の状態にあり，戦後は偵察またはコースタル・コマンドの哨戒機として，1953年ころまで使われている。

「上」ランカスターMk. I。ランカスターの主要生産型はMk. IとMk. III。Mk. Iの1号機は1941年10月31日に初飛行，翌42年2月にはウォデントンの第44スコードロンに装備されて初出撃している。同年4月17日のアウグスブルグの工場爆撃以来，ランカスターMk. Iによる組織的な爆撃がくりかえされるが，なかでも44年11月12と13の両日，ノルウェーの峡湾にひそんだドイツの戦艦ティルピッツを襲って撃沈させた第617と第9スコードロンの31機による戦果は有名である。

「下」1941年5月13日に初飛行したランカスターの原型2号機(DG585)。原型ではマーリン10エンジン(1,145hp)を装備していたが，のちのMk. I生産型ではこれをマーリン20(1,280hp)に代え，背部と胴体下に銃塔を新設した。このためにMk. Iは原型よりも全備重量が10,000-lb(4,530kg)増えて60,000-lb(27,215kg)となったが，性能は優れていた。

Lancaster 2nd prototype





Lancaster Mk. III prototype

〔上〕ランカスターMk.IIIの原型（W4114）。Mk.IIIはMk.Iのエンジンを換装したもので，パッカード・マーリン28（1,300hp），マーリン38（1,390hp），マーリン224（1,620hp）の3種類のエンジンを積んでいる。エンジンのほか，機首の爆撃手席の視界を改善するなどの改造も施された。Mk.Iは3,425機，Mk.IIIは3,039機が生産された。

ランカスターは，大型爆弾が積めるのも特徴の一つであった。当初は8,000-ℓb（3,628kg）爆弾を使っていたが，1943年9月に初めて12,000-ℓb（5,443kg）爆弾を投下，44年6月にはその高貫徹力爆弾"トールボーイ"をトンネル爆破に使っており，45年3月には22,000-ℓb（9,979kg）という10トン近い超大型爆弾"グランド・スラム"でドイツ軍を襲っている。

〔下〕ランカスターMk.II。Mk.IIは空冷のブリストル・ハーキュリーズ6（1,650hp）エンジンを積んだもので，アームストロング・ホイットワース工場で300機が造られている。バルジ型の爆弾倉にしたのもあり，爆弾積量は12,000-ℓbであった。

Lancaster Mk. II prototype





アブロ・ランカスター爆撃機　Avro Lancaster of No. 44 Sqdn, RAF



進撃するアブロ・ランカスター爆撃機。第44スコードロンの所属機である。



Lancaster Mk. III

（上）ランカスターMk. III。写真の機体は1945年にホイットレーに代えて本機を装備した第619スコードロンの所属機

（下）ランカスターA.S.R. III。戦後，英軍に貸与されていたリベレーターがアメリカに引揚げて，コースタルコマンドの洋上哨戒はランカスターが肩代りすることになった。最初に洋上哨戒用に改造されたのがこのA.S.R. IIIで，カンリッフ・オウェン社によって投下式救命ボートが積めるように改造されている。コースタル・コマンドのランカスターは，のちにシャクルトンに代替されるが，A.S.R.3につづいてその改造型であるG.R.3が造られ，同型はのちにランカスターM.R.3と呼ばれて，最後の1機はコーンウォール州セント・モーガンの海上偵察学校に1956年ころまで装備されていた。写真では胴体下に積まれている投下式の救命ボートがよくわかる。

Lancaster A.S.R. III





Lancaster Mk. III of No. 619 Sqdn

〔上〕ランカスターMk. III。左上の写真と同じく第619スコードロンの所属機。

〔下〕ランカスターMk. I（スペシャル）。Mk. Iのバリエーションの一つで，H2Sレーダー装備をはずして，前記の8,000-ℓb，12,000-ℓb，22,000-ℓbといった超大型爆弾を積めるようにしたのをMk. I（スペシャル）といった。胴体下にくくりつけられているのは22,000-ℓbの“グランド・スラム”爆弾である。この超大型爆弾を積むために，爆弾倉扉をとりはらい，爆弾倉は前後に拡張しなければならなかった。

ランカスターMk. Iのバリエーションにはさらに日本の爆撃を想定して改造されたMk. I（F.E）もあったが，これは実用されることがなかった。第35スコードロンに装備されていたこのMk. I（F.E.）の1機は，戦後の1946年にアメリカを親善訪問している。

Lancaster Mk. I (Special)





Lancaster of No. 467 Sqdn, RAF



〔左〕100回目の出撃を完了したランカスターの前で祝盃をあげる第467スコードロンの乗員たち。同機は機首に100回出撃のマークを記入し，ドイツのヘルマン・ゲーリングが豪語した「わが領土上空に敵機の侵入することなし」の意味の英文を書いている。137回の出撃と，ランカスターでは2番目の出撃記録をもつランカスターMk Iの1機〔R5868〕も，第83スコードロンからこの第467スコードロンに移って活躍した機体であった

〔下〕現存するランカスターMk Iの1機。





Lancaster Mk. I

〔上〕歴戦のランカスターMk. I。ビングルークを基地に活躍した第460スコードロンの所属機で，機首に90回の出撃マークが見える。ドイツ本土深く侵攻するランカスターは，消耗も多かったが，こうした歴戦の機体も少なくなかった。1945年1月に除籍された第103スコードロンの1機は，5回のベルリン爆撃を含めて終生の出撃回数は140回という記録をつくっている。

〔下〕ランカスターMk. VI（6）の原型。写真のJB675はMk. VIの原型となったMk. IIIの1機。Mk. VIはマーリン87エンジンを装備，4翅プロペラとし，機首と背部の砲塔をとりのぞいて，特殊のレーダー妨害装置を積んだものであった。1944年秋に，数機が第635スコードロンに配備されているが，めぼしい働きはしていない。写真はVI型の改造をする前のものである。

Lancaster Mk. VI prototype





Lancaster Mk. X

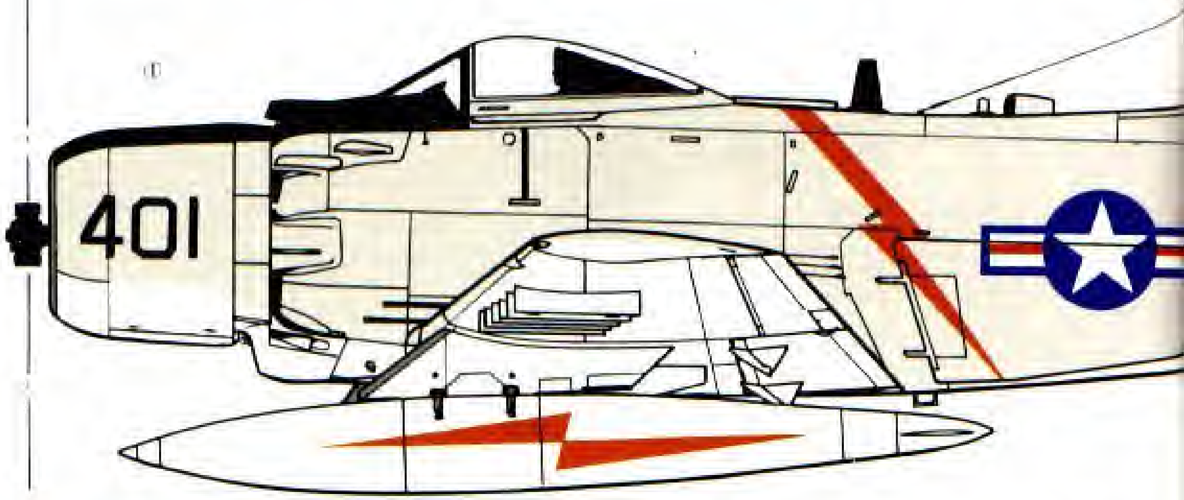
〔上〕ランカスターMk. X（10）．1942年初め，ランカスターはカナダでも生産されることになった．生産を担当したのは，ビクトリ・エアクラフト社で，主にランカスターMk. IIIの製造であったが，ビクトリ製の機体はMk. Xと呼ばれた．カナダ製のランカスターはほとんどがマーリン28エンジン装備で，完成した機体は砲塔なしで大西洋を横断してイギリスに送られ，武装はイギリスで装備された。ビクトリ・エアクラフトでは430機のランカスターを生産している．

〔下〕ランカスターの最終生産型であるMk. VII（7）．Mk. VIIは，背部の砲塔をアメリカのマーチン製（12.7mm機銃2連装）にしたもので，オースチン・モーター社で180機が生産された。この砲塔の位置は，これまでのランカスターよりも前方に移動してとりつけられているのが特徴である．

Lancaster Mk. VII



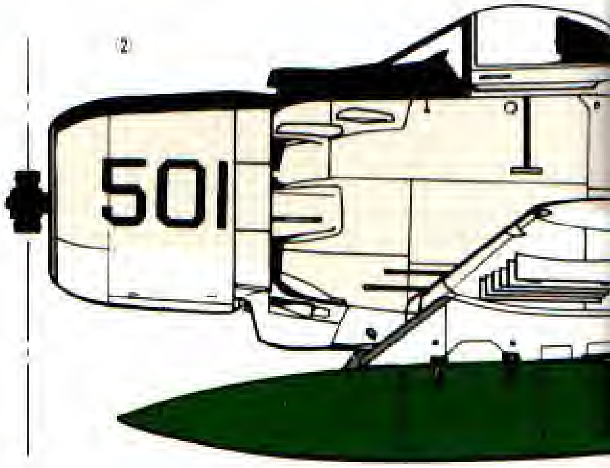
①



DOUGLAS
A-1H (AD6)
SKYRAIDER

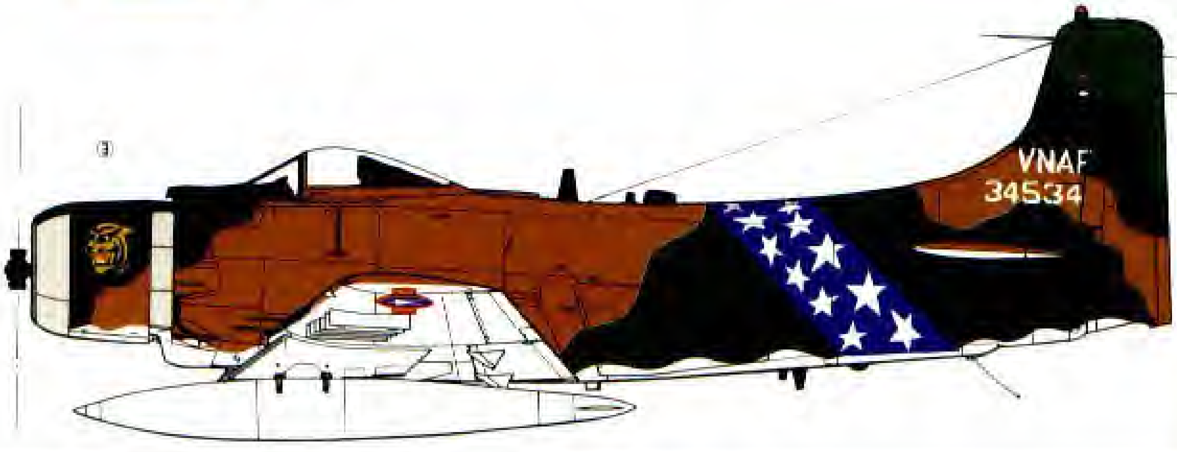
1/40 SCALE KIT

②



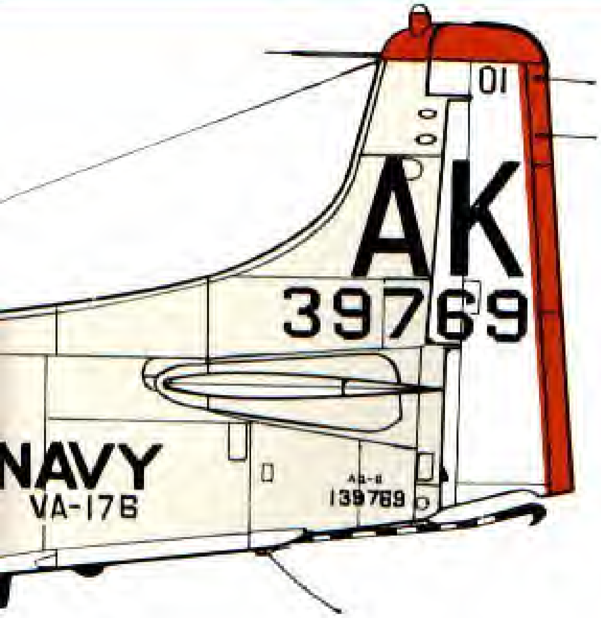
原料が違う高品質
レベルカラー

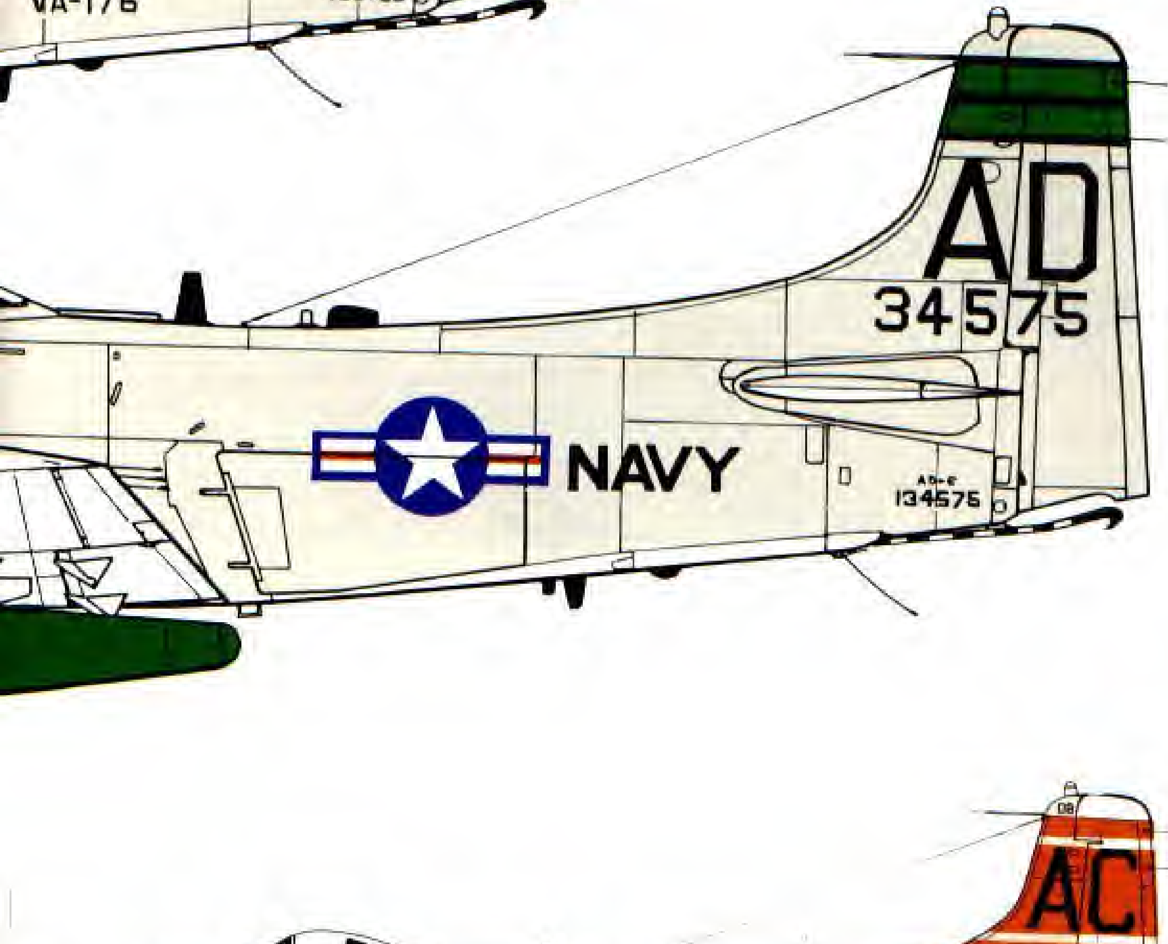
③

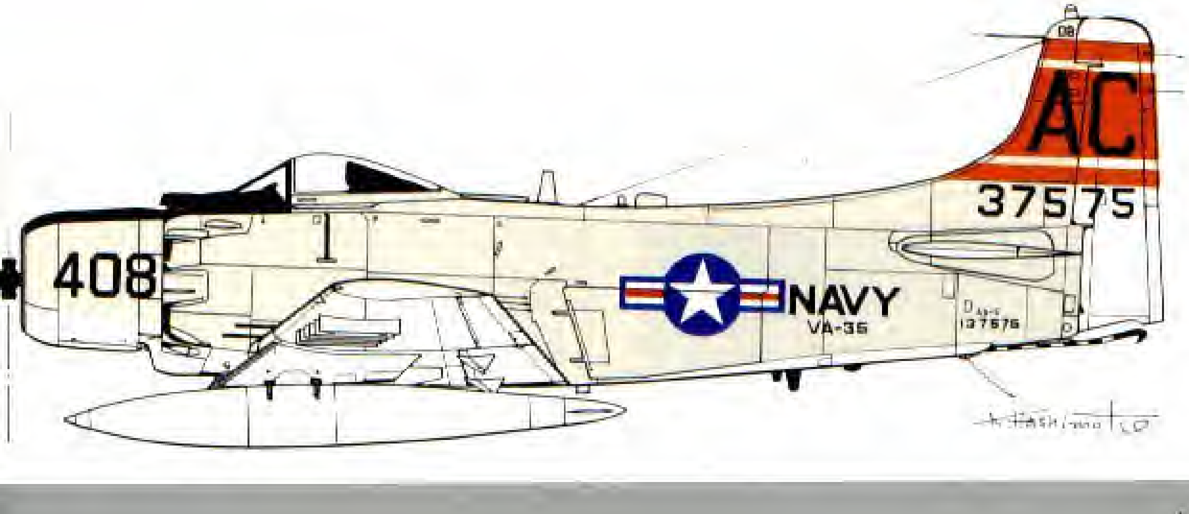


ダグラス
A-1H(AD-6)
スカイレイダーのマーキング集

① AD-6、空母シャングリラ搭載第176攻撃飛行隊"サンダーボルト"所属機。
VA-176 Thunderbolts, SHANGRI LA (CV-38)
② AD-6、第45攻撃飛行隊所属機。
VA-45, RCVW-4.
③ A-1H、南ベトナム空軍第41航空連隊第516攻撃飛行隊所属機。
516th Attack Squadron, South Vietnam A.F.
④ AD-6、空母サラトガ搭載第35攻撃飛行隊"パンサーズ"所属機。
VA-35 Panthers, CVG-3, SARATOGA (CVA-60).







ハイモデリングのための
レベル資料集

ダグラスA-1H(AD6)スカイレィダー

DOUGLAS A-1H SKYRAIDER



☆キットの紹介☆

有名なオール可動式のデラックス1/40スケール，スカイレイダーのキットがレベルから発売中なのはご存知のとおりであるが，今回新しく武装系の異なったニューモデルが発売される。改変部はロケット弾ポッドとミニガン・ポッド，増槽1個の装備となり，塗装は3色のベトナム迷彩に仕上げるようになっている。中央増槽を前後させると，主脚と尾輪が出し入れでき，胴体にある3枚のエアーブレーキも連動で開閉，各舵も可動しキャノピも開閉，実感の出た詳細そのもののエンジンを内蔵するなどとプラプレーン，オール可動時代の傑作キットである。

なお蜂のマーク付でおなじみのVA-176(イントレピッド搭載機)のキットも同時に発売中である。

☆塗装について☆

図1　"サンダーボルト"の名をもつ第176攻撃飛行隊所属機で，機体の上・側面はガルグレー⑪，下面はインシグニアホワイト①+㉟。各翼の前縁，カウリング前縁はシルバーグレイ⑧+⑪，方向舵と電光マークはインターナショナル・オレンジ③+㊽となっている。

図2　RCVW-4所属の第45攻撃飛行隊機で，塗装は図1と同じガルグレーとインシグニア・ホワイト，垂直尾翼の帯と増槽はグリーン④+⑥。

図3　第41ベトナム航空連隊第516攻撃隊機で，機体の上・側面はダークグリーン㊺+㊻とミディアムグリーン⑤+⑲+①+④+㉚，タン⑰+①+③+④+㊱の3色迷彩，下面は白に近いグレー①+⑪+㊿。虎のマークは前向きで左右にあり，主翼国籍マークは下面の左右にだけ記入されている。主脚カバー前面に534の黒文字ナンバー入り。

図4　空母サラトガ搭載CVG-3第35攻撃中隊の所属機，塗装は図1と2と同じで垂直尾翼の帯はインターナショナル・オレンジとなっている。なお各機とも着艦フックは白と黒の塗り分け，機首の光線反射よけは黒つや消し㉝である。　　　　(イラストと解説・橋本喜久男)



← 外翼下面に100-ℓb爆弾12発を装備して待機中の南ベトナム空軍のA-1N。艦上機時代にはなかった着陸灯が主脚柱に新設されたほか、胴体背面にVHFアンテナも増設しているのに注意。
A-1H Skyraider of Viet Nam A.F.

↑ 1951年11月のSEATOの演習で、英空母ビクトリアスに着艦した第52攻撃飛行隊（VA-52のAD6。垂直尾翼上端と増槽はライトブルーに塗り分けられている。
AD6 Skyraider of VA-52.

KIT :
Revell is proud of placing this new kit of Skyraider on market in addition to the currently popular 1/40 "deluxe" kit. Armament components are entirely revised, such as the rocket pod, "mini-gun" pod and external tanks. The new version can be finished in three-color camouflage, familiar during the Vietnam War. The longitudinal slide of the central fuel tank makes it possible to down and retreat the main landing gear and tail wheel. Three air-brakes on the fuselage interplay with each other, and down and close at the same time. The rudder, aileron and other control surfaces as well as the canopy are also moveable. Molded so well like other Revell products, there is no need to say much about the engine, detailed copy of the USAF close support aircraft.

The Skyraider of VA-176, "Thunderbolts", USS INTREPID, popular with the "stinger" marking is also now on sale from Revell.

PAINTING :
Fig. 1. One of "Thunderbolts", VA-176, U. S. Navy. The top and sides of the airplane are Revell Color 11, gull gray, while the bottom surfaces are RC-1 and 30, insignia white. The wing leading edges and cowling are RC-8 plus 11, silver gray. The rudder and the lightning mark are RC-3 plus 58, international orange.
Fig. 2. A-1H Skyraider, VA-45, RCVW-4, U.S.Navy. The camouflage, like that of Fig. 1, is schemed in gull gray and insignia white. The belt on the vertical stabilizer and the external tank are RC-4 and 6, green.

Fig. 3. This belongs to the 516th Sqdn. 41st Wing, Republic of vietnam Air Force. The top and sides are camouflaged in RC-45 plus 55, dark green; RC-16, 18, 1, 4 and 30, medium green; and RC-17, 1, 3, 4 and 30, tan. The bottom surfaces are RC-1, 11 and 34, light gray. The "tiger face" marked on both sides of the cowling faces ahead. Main wing national insignia are only on the under surfaces. Figures, "534", are marked in black on the front side of the MLG door.
Fig. 4. A-1H Skyraider, VA-45, CVG-3, USS SARATOGA. Except for the vertical fin belt of international orange, this is painted in a camouflage scheme, similar to that of Fig. 1 or Fig. 2.
Revell Color For Skyraider :

RC No.	Color		
1	White	3	Red
4	Yellow	5	Blue
6	Green	8	Silver
11	Gull gray	16	Dark green
17	Dark green	18	Black green
34	Sky blue	58	Orange
30	Flat base	33	Black
55	Khaki	45	Sail color

スカイレイダーの塗装に必要な
レベル・カラー

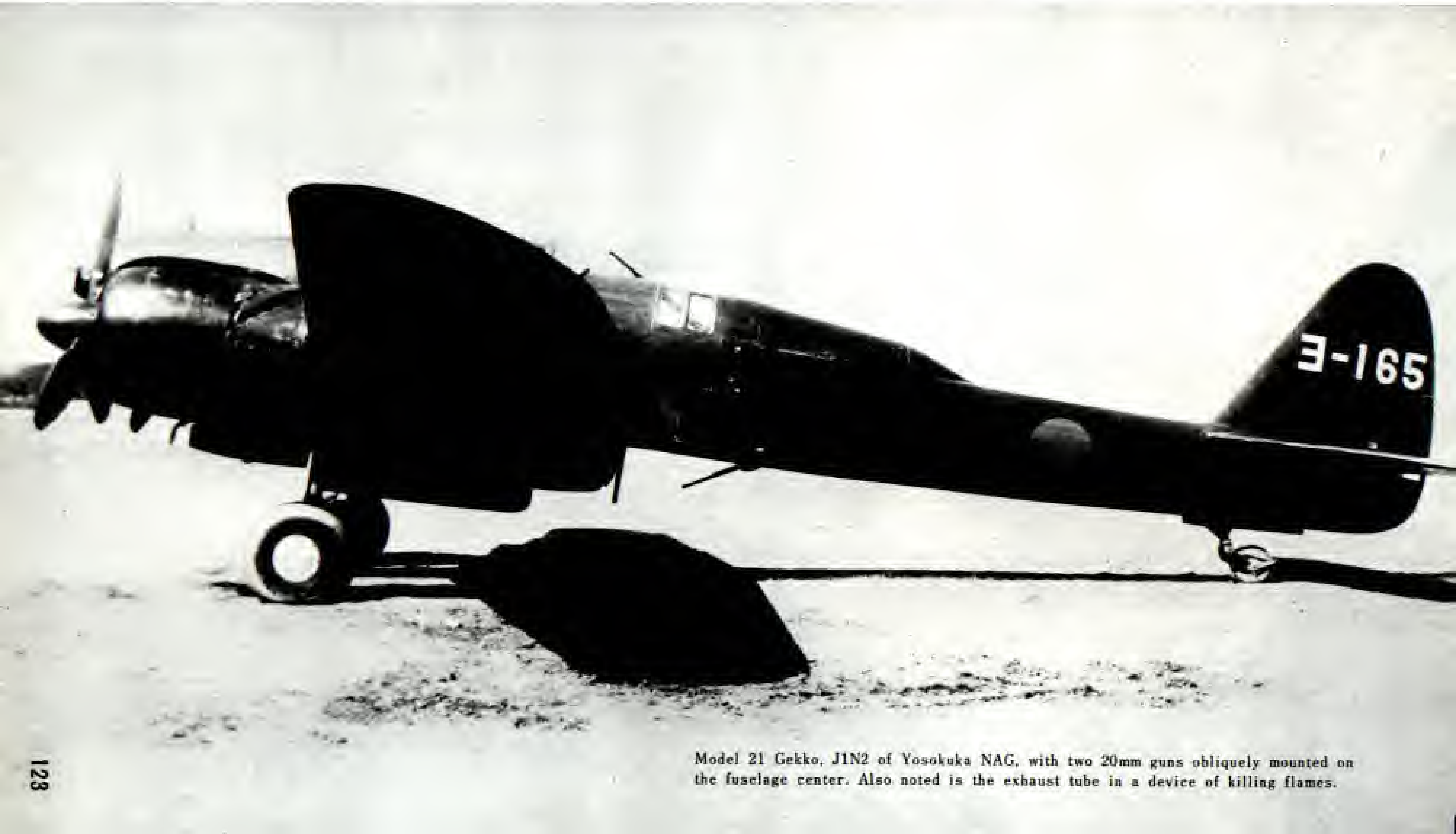
①ホワイト	③レッド
④イエロー	⑤ブルー
⑥グリーン	⑧シルバー
⑪ガルグレー	⑯濃緑色
⑰ダークグリーン	⑱ブラックグリーン
㉞スカイブルー	58黄燈色
㉚フラットベース	㉝ブラック
55カーキ	㊺セールカラー

Douglas AD6 Skyraiders of VMA-332, Miami, Fla.



第332海兵攻撃飛行隊（VMA-332）のダグラスAD6スカイレイダー（1966年3月）フロリダ州マイアミ上空にて。

夜間戦闘機 "月光"



Model 21 Gekko, J1N2 of Yosokuka NAG, with two 20mm guns obliquely mounted on the fuselage center. Also noted is the exhaust tube in a device of killing flames.



Model 21 Gekko, J1N2, "UI-20" of No.251 NAG, distinguished in intercepting the B-17 in the battle of Rabaul.



Model 21 Gekko, J1N2, seized by USF at Omura, Japan. Note the pitot tube, peculiar to this aircraft, hanging down on the nose. 4 Oct 45



96陸攻を掩護する航続力の大きい戦闘機として昭和14年に試作された双発3座遠戦（13試双発陸上戦闘機）は、所期の性能が得られず、戦闘機としては不採用となったが、すでに生産が始まっており、その一部は2式陸上偵察機として南方に送られた。大型爆撃機攻撃のために、この陸偵に斜め銃を積むアイデアは、当時南方の第251航空隊の司令であった小園安名中佐の発案であることよく知られているところである。2式陸偵はこれで夜間戦闘機"月光"として生まれかわった。南方でB-17の夜間爆撃を完封する武勲をたて、本土防空戦ではB-29の邀撃を迎え撃ち、劣勢ながら暗闇にまぎれて忍び寄って数かずの戦果をあげている。総生産機数は480機。

〔123ページ〕中央部胴体の上下に20mm 斜め銃を2門ずつ装備した月光21型。本土防空に活躍した横須賀航空隊の所属機。のちの型では下方の斜め銃を廃して、上方の20mmを3門としたものもあった。写真でその上下の斜め銃がよくわかる。夜間攻撃であるため、焔を押える消焔排気管を装備しているのに注意。

〔左〕ラバウルでB-17の迎撃に活躍した第251航空隊の月光21型。「UI-20」号機である。

〔左下・下〕終戦時に米軍にろ獲された月光21型。大村基地のハンガーにて。機首下にたれ下っているのは本機独特のピトー管。この位置はプロペラ後流のあおりで、スピードの誤差が多かったという。1945年10月4日の撮影。

Effors in 1939 to make a fighter capable of cruising a long range resulted in making a reconnaissance plane in the name of Type 2 Rec. Plane, J1N1C-R. With the obliquely mounted gun, known as an idea of Cdr Kosono, Commander of No.251 NAG, this plane got into the spotlight as a night fighter—Gekko, J1N1—successfully intercepting the B-17 and B-29. A total of 480 Gekko's was produced.





Zero Fighters (Model 52, A6M5), captured by USF at Aslito airdrome, Saipan, 22 June 1944.

苦闘する陸鷲と

今回は大戦末期から終戦にかけて、南方の戦場で苦戦中あるいは囚（とらわ）れの身となった陸海軍軍用機のシーンを特集しました。広大な戦線に投入されて、弓折れ矢つきた精鋭たちの悲しい記録であります。

〔下〕フィリピンのパラワン島に進攻する米軍の迎撃戦でプエルト・プリンセス近くの海岸に撃墜された零式3座水偵。機体をのぞきこんでいるのは米海軍上陸用舟艇（ＬＳＴ）の乗組員たち。後方にその舟艇が映っている。



Type Zero three-seat Seaplane, E13A1, crashed on Palawan, Philippines, is examined by men from a USN LST.







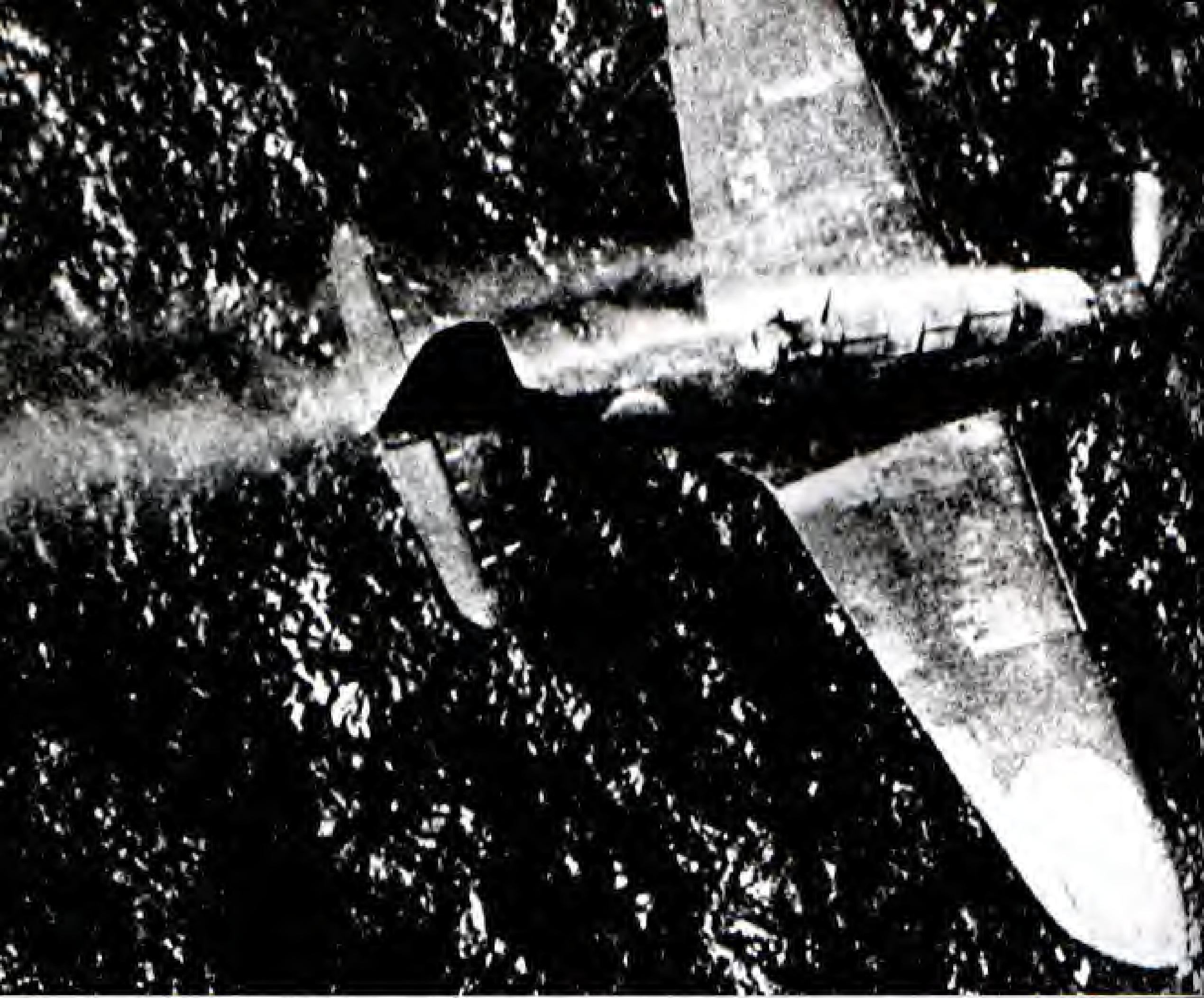
Two D3A1 Carrier Dive-bombers fail to attack a US cruiser off Santa Cruiz Isl. ,Southern Pacific.

〔左〕上陸進攻した米軍にとらえられたサイパン島アスリート飛行場の５機の零戦52型。この５機の零戦は整備のゆきとどいた完全な状態で米軍の手に入り、のちに本国に運ばれてテストされている。後方に、破壊された日本機の残骸が積みあげられている。1944年（昭和19年）６月22日の撮影。〔上〕撃墜される２機の99艦爆。１機は右手に水柱をあげ、１機は海面へ激突寸前。南太平洋サンタクルーズ島近海にて。左手は米海軍の巡洋艦。〔下〕被弾して不時着水する97式飛行艇23型。米海軍の同じく飛行艇ＰＢ２Ｙコロネードに攻撃されたものという。1945年５月10日、西太平洋にて。

海鷲たち



Type 97 Flyingboat, H6K5, striken in flame, in western Pacific, 10 May 1945.



〔下〕これもサイパン島の整備場で米軍の手におちた零戦52型。米軍の物量攻撃は、1944年6月14日の初上陸以来わずか1週間たらずで同島の南半分の補給所を手中におさめ、良好な状態の航空機の戦利品も多かった。この零戦も簡単な整備で飛べそうな機体も見える。

⬆Type 97, Model 3 Torpedo-bomber, B5N2, shot down by a US Navy PB4Y patrol bomber near Truk, June 1944.
⬇Zero Fighters (Model 52, A6M5) captured by US Marines at a Saipan airstrip in June 1944.



Zero Fighters, D3A1, Army Ki 48 and etc. destroyed in the battle of Munda. They were assembled for study by US Marine Corps Intelligence. ➡



D4Y1, D3A2 and etc. captured by USF at Clark Airfield, Luzon, Philippines, 25 January 1945.

〔左〕白煙をひいて海上に墜落する97式３号艦攻。ＰＢ４Ｙプライバティア爆撃機の銃弾によって撃墜されたもので、同爆撃機のパイロットが目撃したところによると、艦攻の後席の乗員は一度ベイルアウトするかに見えたが、ふたたびすわり込んで機と運命をともにしたという。〔上〕フィリピンのルソン島クラークフィールドに放置された日本機の残骸。左手前は99艦爆22型、その後方には彗星11型も見える。クラークフィールドは当時、離着陸場13本を持つフイリピン最大の航空基地。連合軍は1945年２月４日のマニラ入城の前に同飛行場を奪回した。写真は同年１月25日の撮影。〔下〕ソロモン群島のニュージョージア島ムンダ飛行場で空襲によって破壊された日本の軍用機。手前のくぼ地の中とその右上の片翼と首なしの機体は零戦の22か32型、その右手は99双軽の機首、左端に見えるのは99艦爆11型である。







↑Army Type 1 Fighter, Ki.43, Hayabusa starts falling after being hit by Mitchell bombers of the 11th US Army AF off Korile Islands.

〔上〕B-25ミッチェルの火網にふれて撃墜される1式戦隼。被弾直後のシーンで、隼はまもなく機首を下げて降下した。B-25はアリューシャンのクリレス島を基地とする陸軍第11空軍の所属機。

〔下〕空襲されるスマトラの日本軍飛行場。超低空で急襲する米軍の尾翼越しに撮影したもので、地上の機体は97式重爆。待避壕に走る隊員たちの姿も見える。

〔右上〕これも米軍の空襲を受けた2式複戦屠龍。ニューギニア北方のワクデ島の飛行基地にて。米軍は同島への上陸に先立って、1944年5月17日、同島への猛爆撃を行なったが、この屠龍はその爆撃で飛行不能となったもの。

〔右中〕ニューブリテン島のラバウル近くの飛行場でろ獲された3式戦飛燕1型。昭和18年（1943年）4月にラバウルに進出、ニューギニア航空戦で活躍した飛行第68戦隊の所属機である。エンジンを点検しているのは米軍のパイロットである。

〔右下〕破壊されたニューギニア戦線の1式戦隼の残体。写真の機体は昭和18年11月からニューギニア戦線へ送られた飛行第77戦隊の所属機である。

↓Type 97 Bomber, Ki.21, Ginga. Japanese run for cover leaving the plane. Selaroe, Netherlands East Indies.





Type 2 Two-seat Fighter, Ki.45-Kai-Ko, Toryu bombed and seized on Wakde, New Guinea, mid-May 1944.

⬇ Army fighter, Ki.61, Hien. US airmen studies details of the plane, the first of its type to fall undamaged into USF hands.



⬇ Army Type 1 Fighter, Ki.43, Hayabusa (Model 2-Otsu) of No.77 Sentai captured by ground troops under command of Gen Macarthur in New Guinea.





German Military Aircraft during WW II; Dornier Do217 Bomber

ドルニエ Do 217





前号につづいてドルニエDo 217 E。すべてこれまで公表されなかった就役当時の鮮明な写真である。

〔左上〕編隊での爆撃行。新鋭爆撃機としてさっそうと登場した1942年初めごろのスナップである。

〔左下〕ハンガーで整備中のDo 217 E。エンジン整備には専用の梯子を使い、そのほか点検個所の高低に応じて、いろんな台を用いている。このように施設の充分でない野戦での大型機の整備は骨の折れる仕事である。

〔上〕透明風防でカバーした背部の電動式砲塔のクローズアップ。13㎜MG131機銃（500発）1挺を装備。その左手に見える側方用の機銃は7.9㎜MG15旋回銃。

〔下〕上の写真後方に見えるのと同じ機体で、人力で移動中。尾輪にステッキをつけて"操舵"しているのに注意。





〔上・下〕これも部隊配備まもないころのDo217 E。本機は1940年末にデビュー、41年から42年年初めにかけて、Do 17 の代替機としてぞくぞく部隊に配備されたがBMW801 エンジンの性能が思わしくなく、期待したほどの成果をあげ得なかった。'42年末の装備機数は 245機。しかし爆撃部隊の主力はいぜんとしてHe111とJu 88であった。







〔右上〕Do217Eの爆弾倉に装備された4発の1,102ℓb爆弾。 本機の爆弾倉内の搭載量は最大5,550ℓb。写真の組合わせのほかに551ℓb爆弾8発または2,205ℓb爆弾4発＋551爆弾2発であった。外装も含めて最大は8,818ℓb。





GRUMMAN F7F TIGERCAT

グラマンF7F／タイガーキャット









グラマンＦ７Ｆタイガーキャットは、米海軍で制式採用された最初の双発艦上戦闘機で、前脚形式の最初の艦戦でもあった。45,000トンのミッドウェイ級空母への搭載を予定した対地支援任務をかねる重戦で、試作１号機のＸＦ７Ｆ-1が初飛行したのは1943年12月。当時太平洋の島伝いの進攻作戦で支援機の必要に迫られていた海兵隊では、ただちに500機を発注。翌44年４月から最初の量産型Ｆ７Ｆ-1の引渡しが開始された。しかしその後状勢の変化で要求性能が変り、実用上の問題などもあって開発計画は遅延し、結局タイガーキャットは、２次大戦の戦場では活躍の機会にめぐまれなかった。開発は戦後もつづけられ、各型を含めて364機が生産されて、海兵隊の数個中隊に装備されたが、まもなく新鋭のジェット戦闘機に代替されることになる。

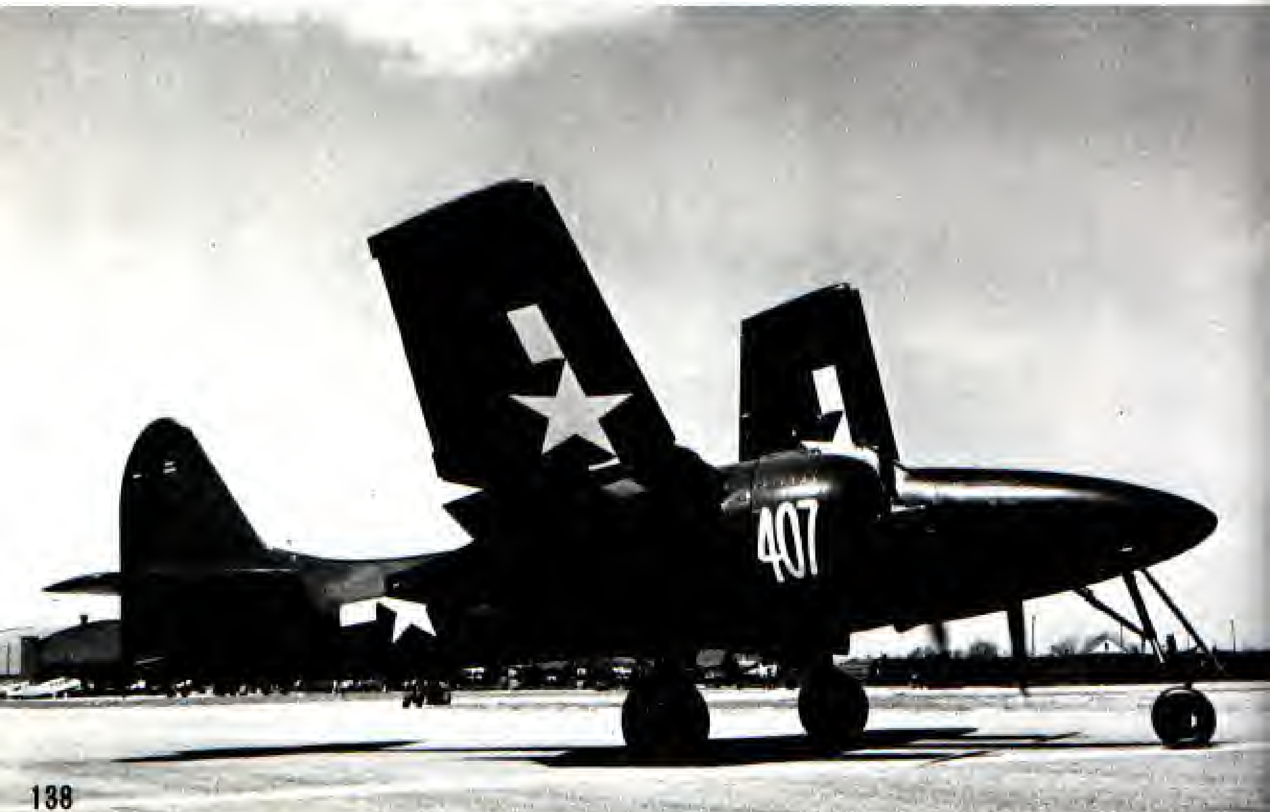
〔左・下〕２機造られたＸＦ７Ｆ-1の１号機。R-2800-22Wダブル・ワスプ　エンジン(2,100HP）の双発で、主翼に20mm機関砲４門、機首に12.7mm機銃４挺の重武装、内翼下に1,000 lb爆弾２発、または胴体下に魚雷１発を装備することができた。

〔左ページ下・上〕最初の量産型Ｆ７Ｆ-1につづいて生産された複座夜戦型のＦ７Ｆ-2N。





「上・下」F7F-2N夜間戦闘型は、操縦士席の後方にレーダー操作員席を設け、このため燃料積載量は355英ガロンから312英ガロンに減少している。原型のXF7F-2 1機につづいて、65機が生産された。複座の夜戦型は、戦後も遠距離用レーダーを積んだF7F-3NとF7F-4Nの両型が造られている。写真の機体は全面グロス・シーブルーの塗装で、国籍記章のインシグニア・ブルーの部分が略されている。





エアラインの翼

フィンランド航空 ⑤

フィンランド航空がＤＨ89ドラゴン・ラピッドにつづいて購入した陸上機はダグラスＤＣ-2。導入したのは1941年、旅客収容数は14人とラピッドにくらべて一挙に倍増した。同航空はこのころ、ルフトハンザと共同で、本機とＪu52を使ってヘルシンキからベルリン、ストックホルム間を結んでいる。

名機ＤＣ-3の前身であるＤＣ-2は量産１号機が1934年５月に初飛行、220機が生産されて、アメリカ国内や海外のエアラインで使われている。



●実物大の零戦も"出演"する

"あゝ決戦航空隊" 撮影



解説・小橋良夫

東映大作"あゝ決戦航空隊"は、秋の公開を前に連日撮影がつづけられている。この映画は太平洋戦争末期、世界戦史上比類がないといわれた神風特別攻撃隊の奮戦ぶりと特攻隊生みの親といわれる大西滝次郎中将の生涯を描いたものだが、そのなかで本誌読者に興味があるシーンをお目にかけることにしよう。

"Kamikaze Special Attack Unit" activities are being filmed by Toei Motion Picture, Tokyo, in an attempt to run it this fall. Entitled, "Ah, Kessen Koku-tai" (Ah, air suicide corps), this movie describes admirable fights by the Kamikaze in the latter stage of the Pacific War, Known unique in the world history, and the life of Adm. T. Onishi, the parent of the unit. Koku Fan picked here some of the scenes seemingly attract readers' interest.



①撮影のため1機100万円をかけて作った実物大の零戦52型。本誌読者にとっては、機首カウリングの形状、主脚格納孔など不満があるかもしれないが、零戦のムードは充分に再現されている。浜松基地にて撮影。

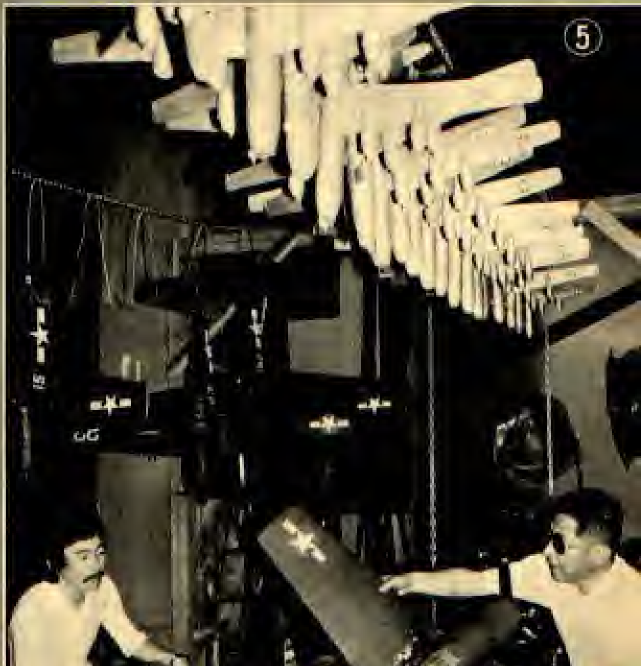
②日本本土に来襲するB-29大編隊の撮影。スタジオ内に吊られたB-29群のうち、大部分が機関部にモーターライズされたプロペラが回転するようになっている。

快調





③日本側の迎撃で炎上するB-29。手前のB-29は1/10という大きなもの。このあと、空中で爆発分散する。
⑤特殊撮影に使用されたF6Fヘルキャットを取材する筆者（小橋良夫氏・右）。主翼付根にある爆破用の火薬の仕かけや大きさがよくわかる。頭上に吊り下げられているのは、遠景用のB-29。







④実物大の零戦の風防ごしにかまえるカメラ。OPL照準器も精巧に作られ、パイロットの眼から見る戦闘シーンに使用される。
⑥零戦対F6Fの対決。地上に固定されたF6Fが零戦の攻撃を受けて撃破されるシーン。左側の人が持っているラジコン・スポーツ機はプロペラ後流の風を送って実観を出すためのもの。